ある。

私は凡てのものを信ずる前に、先第一に私自身の實在を信じなければならぬ。そして私の肉體的存在は空想や想像や理屈ではない、たゞ事實だ、絶對不可侵の事實だ。

私の肉體的存在は、私の國家日本國の形體的存在である。私の祖先が私に遺してくれたものゝうち最も切實なるものは私のこの肉體であつて、この肉體を如何に所置するかといふことが、現在私にとつて最も重且大なる問題であるならば、それは同時に日本國を如何にせんと云ふ問題に外ならない。國家の存在は個人の存在を以て基本とする。個人の存在に

して確實ならずんば、國家の存在亦不確實ならざるを得ない。そして確固たる中心に立脚せる個人の自由は、やがて國家の自由神聖を保證し、個人の害惡は常に國家の害惡である。國本は國民生活の確固不動なる中心を示現し、假定や空想や想像にあらずして事實なるとき、そは絶大の理想であつて、個人の生命は常に國本に歸一する。

私はクロポドキン、ドストエフスキー、トルストイ、オイケン、ベルグソン、シユライエルマツハ、ゼームス、その他輓近西北歐の權威にびざまづいた。彼等は等しく理想に渴いてゐた。絶對をつかまんとて悶いてゐた。眞理に飢えてゐた。